

12節から26節までに記されているペトロの説教は、17節から後半である。そこでは主イエスを十字架につけたエルサレムのユダヤ教徒に、悔い改めを勧める勧告をしているが、この勧告の中で、17節から21節までは、万物更新の時、キリストが再び来られる前に、先ず選民であるイスラエルが立ち帰っているべきだ、という訴えが語られていた。

今日の22節から26節までのところでは、イスラエルが受けている神様の特別な恵みを語り聞かせて、その特別な恵みの故に立ち帰ることを勧めるところである。

イスラエルの受けている特別な恵みとは、一言で言うと、25節「**あなたがたは預言者の子孫であり、……契約の子です**」、この言葉に要約されている。日本語訳では、「**預言者の子孫**」「**契約の子**」と二つにわけてあるが、原文は「**預言者たちと契約の子です**」という一組の表現である。その時の「**預言者たちと契約の子たちです**」の「**子たち**」というのは、年齢の上から言う「**子ども、children**」ではなくて、相続権の上から言う「**息子、sons**」という表現を使ってある。

そこで、22節から24節までは、その「**預言者たちの子である**」ということ。25節では、「**契約の子である**」ということを説明する。そして、その2つに基いて、最後に26節が結論として「**悔い改め**」を訴える。こういう構造である。

22-23節。「**モーセは言いました。『あなたがたの神である主は、あなたがたの同胞の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる。彼が語りかけることには、何でも聞き従え。この預言者に耳を傾けない者は皆、民の中から滅ぼし絶やされる。』**」

ペトロが引用しているモーセの言葉は、申命記18章15節、18節、19節にある言葉。申命記18章19節では「**聞き従わない者があるならば、わたしはその責任を追及する**」とある。これがペトロの引用文では、「**民の中から滅ぼし絶やされる**」となっている。これはどういうことかという、申命記の前にある「**レビ記**」の中で、新共同訳では17章の始まりのところに「**神聖法集**」(17-26章)という小見出しがあり、この「**神聖法集**」の中に繰り返して、言うことを聞かない者があれば「**民の中から絶たれる**」、「**民の中から滅ぼされる**」という似た脅かしの言葉が出てくる(17:9、14、19:8など)。それがここに用いられている。

申命記18章でモーセが「**わたしのような預言者**」を予告したが、ここで「**わたしのような**」と、生けるまことの神とイスラエルの民の間に立って神の御声を告げるという意味(詩編106:23「**主は彼らを滅ぼすと言われたが、主に選ばれた人モーセは、破れを担って御前に立ち、彼らを滅ぼそうとする主の怒りをなだめた。**」、エレ15:1「**主はわたしに言われた。『たとえモーセとサムエルが執り成そうとしても、わたしはこの民**

を願みない。わたしの前から彼らを追い出さない。』）」

申命記 18 章の「わたしの**ような預言者を**」と記されているのは、モーセ以後にどんどん出てくる預言者たちのことを指しているが、言葉としては単数形で書いてあるため、口語訳でも新改訳でも「**ひとりの預言者**」とわざわざ訳されていたほどである。そこからやがてはメシア的な人物の到来を予告しているのだと考えられるようになった(ヨハネ 6:14, 15「**そこで、人々はイエスのなさったしるしを見て、『まさにこの人こそ、世に**来られる預言者である**』**と言った。イエスは、人々が来て、自分を王にするために連れて行こうとしているのを知り、ひとりでまた山に退かれた。」)

ここで、「**世に来たるべき預言者**」とは「**王**」に他ならないという、まさにメシア的預言者である。

モーセがそういう預言者を「**立てられる**」と言ったこの未来形の動詞は、もともとはモーセの時点から見て将来、歴史の中に現れるだろうとか、あるいは神様が預言者としてお立てになるだろうという程度の言葉だったが、ところがこの「**立てる**」という言葉(αναστήσας、アナステーサス)そのものは、使徒言行録の例えば 2 章 24 節「**しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられた**」の「**復活させられた**」と訳された言葉である。31 節では、名詞の形で「**キリストの復活について前もって知って**」こう歌った、と訳されていた。

だからモーセの預言は、メシア的な預言者主イエスの登場と、その主イエスが復活することの預言と二つを含んでいる、こうペトロは理解しているのであろう。

24 節。「**預言者は皆、サムエルをはじめその後に預言した者も、今の時について告げています。**」

旧約聖書に沢山出てくる預言者の中で「**サムエル**」を挙げているのは、本格的に「**預言者たち**」という複数の預言者たちがずっと登場し続ける出発点であるから。それは、サムエルが預言者学校をつくって養成を始めたからである(サム上 7:15-17、10:5、19:20)。しかもまた、サムエルが油を注いで王を立て(初代王サウル王、二代目のダビデ王)王国が生まれることによって、「**預言者**」がこの王国を、道を誤らせないためにずっと監視し続け、説教し続ける役目を持ったことから「**サムエルを始め**」と言っているのだと思われる。

「**今の時**」とは、「**今の日々**」という言葉。つまり、「**モーセのような預言者**」である「**イエス**」が来て、しかも「**立てられ**」つまり「**復活**」した、そしてそれを「**わたしたちは、このことの証人です**」とペトロが説教している「**この日々**」を指している。今まさに、使徒ペトロが説教をしているこの「**時**」。

25 節。「**あなたがたは預言者の子孫であり、神があなたがたの先祖と結ばれた契約の子です。『地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける』と、神はアブラハムに言われました。**」

「**預言者**」というのが複数形で書いてあるが、「**契約**」というのは単数形で定冠詞をつけて記している(της διαθήκης、テース ディアセーケース)。実際には、神様が選民と結んでくださった契約には、創世記に登場するアブラハムなどの族長たちと結ば

れた契約(創 15 章、17 章など)とモーセを通してシナイ山で結ばれた契約(出 20 章から 24 章)の二つあるが、ルカがその福音書と使徒言行録で「契約」と呼ぶ時にはいつでも、族長(アブラハム)との契約のことである。シナイ契約をそのように呼ぶ例はない。

「あなたがたの先祖と結ばれた契約」の「先祖」というのも複数形である。だが、族长イサクやヤコブに繰り返された契約とか約束は、實際上、アブラハムとの契約の繰り返しに過ぎない。だからペトロは、その「アブラハム」との契約を引用しているのである。

このアブラハムとの契約も創世記の中に、2, 3 回、別々のところに書いてあるが、ここでペトロが引用しているのは、創世記の 22 章 18 節、モリヤの山の試練の後、神様が語りかける御言葉、「**地上の諸国民はすべて、あなたの子孫によって祝福を得る**」、この文章を引いている。この言葉の中で「**あなたの子孫**」とあるのは、形は単数形だけ集合名詞であるから、内容的には「**アブラハムの無数の子孫たち**」を表していた。

しかし、アブラハムの子孫たちの中には、女奴隷ハガルとの間で生まれたイシュマエルの系列と、正妻サラから生まれたイサクの系列と、同じ「子孫」と言っても違う子孫がある。パウロは、この区別に着眼し、アブラハムの「子孫」というのは複数形ではなくて単数形だという理屈から、ガラテヤの信徒への手紙の 3 章 16 節「**ところで、アブラハムとその子孫に対して約束が告げられましたが、その際、多くの人を指して『子孫たちとに』とは言われず、一人の人を指して『あなたの子孫とに』と言われています。この『子孫』とは、キリストのことです**」と、こう結論的に断言した。

ペトロの今日の説教で、アブラハム「**から生まれる者**」、アブラハムの子孫と言っていたのも、パウロと同じように、イエス・キリストのことを言ったのであろう。そして、それを書いているパウロの従者ルカ自身も、アブラハムの子孫とはイエス・キリストのことだと思っていたに違いない(ルカ 1:55)。だから「**地上のすべての民族は**」アブラハムの子孫イエス・キリストによって「**祝福を受け**」ていく、こういう契約である。

この全人類に行き渡って行く「神」の「祝福」を、この「契約の子」であり相続人であるイスラエルが拒んで受けないと言う法はない。「あなたがたは……契約の子」たちだから、アブラハムの子孫イエス・キリストを通して「**すべての民族**」に祝福がおよんでいくその真っ先に「**あなたがた**」が悔い改めてこの「**祝福を受ける**」べきだ、そういう論旨である。

26 節。「**それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださいましたのです。それは、あなたがた一人一人を悪から離れさせ、その祝福にあずからせるためでした。**」

この二つに分かれて訳されている言葉は、ギリシア語原文では一つの文章となっている。後半の文章は直訳すると「**あなたがたの一人一人を悪から離れさせることにおいて、あなたがたを祝福しようと**」「**遣わされました**」。こういう文章である。

「**離れさせる**」と訳されている言葉(αποστρέφειν、アポストロペイン)は、19 節で「**悔い改めて立ち帰りなさい**」と言われた動詞と殆ど同じ語源のよく似た言葉である。「**悪から離れさせる**」「**悪から立ち帰らせる**」こと「**において、あなたがたを祝福しようと**」。

新共同訳は「その祝福にあずからせるため」と訳しているが、こう訳すると、25節で「『地上のすべての民族は、あなたから生まれる者によって祝福を受ける』と……アブラハムに言われ」た「その祝福にイスラエルもあずかる、参与する」という文章にしか読めなくなる。他の民族も全部アブラハムの末から祝福を受ける。そのあらゆる民族が受ける祝福にイスラエルも「あずかる」、お裾分けをしていただく。

しかし、原文はそんなことを言っていない。「一人一人を悪から離れさせることにおいて、あなたがたを祝福しよう」と主イエスを「遣わ」されたのだ、と言っている。神様は全人類に遍く祝福していくその一つとして「あなたがた」にも祝福が及ぶ、そういうことではない。「あなたがたは預言者の子、契約の子」である。だから、神はこの契約の民のために「祝福をしよう」とイエスを遣わされる、そう言っている。

イスラエルが受けようとしている祝福は、世界の他の民族がいただく祝福とは違う。では、その祝福とは何か。「あなたがた一人一人を悪から離れさせることにおいて」、つまり、立ち帰りをさせることにおいて、イスラエルは特別な「祝福」をいただくのだ。こう言いたいのだと思われる。

19節では「悔い改めて立ち帰りなさい」と命じられたのだけれど、実は「悔い改め」というのは、神が選民イスラエルを祝福しようとしておられる神からの賜物である。この先の11章18節で、異邦人イタリア人コルネリウスに聖霊が降ったという話をペトロがして「この言葉を聞いた人々は—ユダヤ人たちは—静まり、『それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ』」、直訳すると「命への悔い改めを与えてくださったのだと言って神を賛美した」。「命への悔い改め」とは神が選民に「与えてくださる」恵みの賜物である。それが「異邦人にまで」与えられたと言って驚く。

「それで、神は御自分の僕を立て、まず、あなたがたのもとに遣わしてくださったのです。」

「立てる」と訳されている言葉は、22節で使われている言葉と同じで、この預言を受け止めている。つまり、単に歴史の上に登場するとか預言者や僕として任職されるというだけではなくて、死者の中から「立つ」、復活するという含んでいる。

その上、「まず、あなたがたのもとに遣わしてくださった」。この言葉は、主イエスの復活は、実は「あなたがた」のためなのだ、ということ。ナザレのイエスが復活し、そして聖霊によって使徒たちに福音を語らせているという形で、今イスラエルの中に「遣わされた」。このイエスが「復活して」生きているということ。「イスラエルの中に遣わされた」ということは、どちらも、「まず、あなたがた」のための恵みなのだ、そう言っている。

勿論、言外に、“もし、あなたたちがこの恵みに応えなければ、この福音と恵みは異邦人に行ってしまいますよ”という異邦人への宣教のことが暗示されているけれど、今日の説教でペトロが一所懸命伝えているのは、「まず」何よりも選民の「あなたがた」のために神は主イエスを復活させ、その復活した主イエスを「あなたがた」に「遣わ」したのだ、「あなたがた」はそれだけの恩恵を受けている「預言者たちの子孫、……契約の子ら」なのだ。こう言って「悔い改めて立ち帰りなさい」と命じたあの命令を、改めて神様の祝福の賜物として素直に受け止めるように、ペトロは説教を閉じる。